脳の機能と外国語習得

伊　藤　克　敏

「ことばはどのように習得されますか」と質問すると、大抵の学生は「周囲のことばを真似て覚えて行きます」と言う答えが返って来ます。果たして、この答えは正しいのでしょうか。こどもは外国へ行ったら、すぐ、外国語を話すようになる、と言われていますが、事実は、そうではないようです。個人的な話で恐縮ですが、在外研究でボストンに連れて行った筆者の当時８歳の子ども（M子）は、最初の数ヵ月位は“Hi”, “Yes”, “Bye”と言った「決まり文句」以外は殆ど、英語を話そうとしませんでした。電話がかかってくると“Hello”, “Yes”, “OK”, “See you”, “Bye”といった決まり文句で、返事をするだけでした。第二言語習得の初期の段階で遊び等で使う決まり文句を習得することは多くの学者によって指摘されています。M子は第二言語習得論で言う「沈黙の期間」(silent period）にあったようです。脳の機能から言いますと、後頭葉でことばを理解し、側頭葉で、じっくり溜め込んでいたことになります。数ヵ月頃から急にきれいな発音で英語が少しずつ出て来ました。そして、１年後帰国する頃には、近所の子どもたちとかなり話せるようになっていました。しかし、12歳と13歳の姉は英語を話すのに相当苦労していたようです。末娘のM子は丁度言語習得の敏感期（sensitive period）にあったのがラッキーだったと言えましょう。

言語学者として知名の故服部四郎東大教授は海外に在住のお孫さんが来日した折、夏休み中、日本語の集中訓練をされたのに、滞日中は殆ど日本語を話そうとしないのでがっかりされたのですが、帰国後、日本語が次々に出てきた、というエピソードを日本言語学会の講演で紹介されたことがありました。側頭葉で溜め込まれた日本語が帰国後、前頭葉から出て来た訳です。側頭葉のウエルニッケ領域と前頭葉にあるブローカ領域との間に伝導線維が走っており、側頭葉から伝導線維を通ってことばの情報がことばの産出を司るブローカ領域にどんどん送りこまれて行くのです。目と耳から入ったことばは側頭葉でじっくり醸成され、それが徐々に前頭葉から産出される訳です。

こういった習得過程は大人の場合も同じで、耳と目から外国語をたっぷりと入力することが、豊かな外国語能力を養成するには不可欠な訳です。こういった「入力仮説」(Input Hypothesis）が1980年頃南カリフォルニア大学の Krashen 教授によって提唱されましたが、脳の機能から言っても妥当な説であると言えます。従って、ことばは単に模倣、反復と言った単純な方法だけで習得できるものではなく、膨大なインプット（クラッシェンは massive amount of input と言うことばを使っています）が必要となる訳です。つまり、多量の聴取（hearing）と読書（reading）が必要不可欠な条件となります。どのように美味しく、学習者に多量のインプットを与えることができるかが外国語教育の鍵と言えましょう。